

確かな学力を身に付けさせるための個に徹した支援の研究
～ 「分かる・できる」を支えるUD環境の構築とUD授業の展開 ～

三島村立三島片泊学園

1 研究のねらい

本校の学校教育目標は「自ら学び、考え、実践できる、心豊かでたくましい片泊の子供を育てる」である。この目標を達成するためには、「基礎・基本」の定着が欠かせない。

しかし、本校の課題は、個々の学力差が大きいことであり、その「学力の二極化」が円滑な授業展開を阻む要因となっている。

そこで、支援を要する児童生徒だけでなく、すべての児童生徒に学習しやすい環境と分かりやすい授業を提供する必要があると考えた。その手立てとして、「UD（ユニバーサルデザイン）」の視点を取り入れた学習環境と授業展開について研究・実践していくこととした。これらの実践を積み重ねていくことで、個に徹した支援や指導が実現できるのではないかと考えている。

2 研究の概要

研究主題の具現化を図るために、研修部に「環境整備部」と「研究推進部」を組織し、次のような取組を立案した上で、研修を進めることにした。

環境整備部	<ul style="list-style-type: none">・ 個人の特性把握（NRT分析）に基づいた「個人カルテの見直し」・ UDの視点に立った「環境整備」の在り方
研究推進部	<ul style="list-style-type: none">・ 日常の実践に基づいた「共通実践事項の設定」・ 児童生徒の「分かる・できる」を支える「UD授業の展開」の構想

3 研究の内容

主題を追究するに当たり、個に徹した支援の在り方とUD授業の展開についての仮説を立てた。

仮説 1	NRTの分析方法を工夫し、学力結果と個々の特性も把握することで、個に徹した支援の在り方が充実し、学力を高めることができるのではないかと。
仮説 2	UD環境を整え、UD授業の展開を行うことにより、児童生徒のつまづきを解消し、児童生徒の「分かる・できる」の手立てになるのではないかと。

4 研究の実際

(1) 環境整備部の実践

ア 個人カルテの見直し

環境整備部では、NRT標準学力検査の各教科における個人の理解度を記した従来の個人カルテに、個人の特性「学習ペースと学習適正」や「知的作業の特質」、「知能・学力相関座標（オーバーアチーバー、アンダーアチーバー等）」も分析項目に加え、詳しく分析していけるように見直しを行った。また、「学習スタイル診断カード」を活用することで、個々の思考パターンについても記述できるようにし、個に徹した支援が実現できるよう工夫した。

イ 環境整備

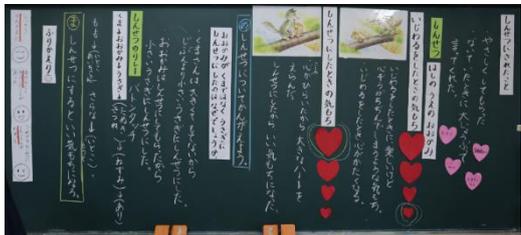
環境整備では、教室内整備及び掲示物の工夫等を行った。教室前面は情報量の調整を行い、児童生徒に与える刺激量を軽減させた。また、掲示物を構造的に設営し、精選していくことで、教室内におけるUD環境を整えた。

(2) 研究推進部の実践

ア 共通実践事項の設定

日頃から各学級で実践している取組を抽出した上で、前期課程・後期課程双方に共通した実践事項を設定し、前期課程から後期課程への「つなぎ」がスムーズに行われるようにした。

イ UD授業の展開

導入	<p>【前時の復習】 前時の復習は、学力定着に大きく影響すると考えられるため、黒板に既習事項確認コーナーを設け、必ず振り返りを行ってから授業を行うようにした。</p> <p>【ICT活用】 ICTを有効に活用することで、短時間で既習事項を確認させることができたり、学習意欲を向上させたりといった効果が期待できるため、振り返りや課題提示の場面では、積極的にプレゼンソフトを使用するようにした。</p> <p>【授業の見通し】 単元や一単位時間の見通しをもたせるために「今ココカード」を使い、現在の学習ポイントを確認させるようにした。そうすることで、「これから何をすべきか」ということを明確にし、学習がスムーズに進められるようにした。</p>
展開	<p>【発問の工夫】 児童生徒が思考する時間を確保するために、教師は発問を厳選する必要がある。授業前には、意図が明確な中心発問を設定しておいたり、思考をゆさぶる発問を準備しておいたりすることで、児童生徒の深い学びが実現できるようにした。</p> <p>【課題の多様化】 児童生徒の学力差に対応する手立てとして、基礎的課題や発展的課題を複数準備しておき、児童生徒の状況に応じて取り組ませるようにした。</p>
終末	<p>【板書の構造化】 授業内容が一目で分かり、児童生徒の「思考の流れ」がスムーズに構成できるよう、UDや特別支援教育の視点に立った板書の構造化に取り組んだ。</p> 

5 研究のまとめ

成果	<ul style="list-style-type: none">○ 教室環境を整え、見通しをもった授業を展開することで、児童生徒を授業に集中させることができた。○ 発問の厳選を行い、児童生徒に発問の意図をしっかりと伝えられたことで、無駄な時間を省くことができ、思考の時間を確保することができた。○ 課題を複数準備したことで、児童生徒の状況に応じた課題を選択させることができ、個に徹した指導を実現することができた。
課題	<ul style="list-style-type: none">● 中心発問を厳選し、授業の山場をどのように構成していくか考えていく必要がある。● 教科指導と特別支援の専門性を考慮した上で、個に徹した具体的な手立てを考えていく必要がある。

6 今後の取組

「授業のUD化」は「環境整備の構築」と「授業の質の高さ」が前提である。取組1年目の成果をもとに来年度は児童生徒の変容が明らかになるような調査の工夫などを行い、今後も継続的・長期的な取組を実施していく。また、共通実践事項は実態に即したものを設定し、「9年間の学びの系統性」を意識しつつ、更にUD化された授業を構築していきたい。